様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 8 月 30 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０６６８
研究課題名（和文）日本中世における沿岸部開発の総合的研究

研究課題名（英文）The general research about development in the coastal area in the Medieval Period in Japan.

研究代表者
綿貫　友子（WATANUKI TOMOKO）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40314447

研究成果の概要（和文）：沿岸地域の開発は、浚渫・築島（島築／築港）などの港湾整備、干拓・治水・利水などの耕地開墾と土地造成に関わる事項など、多数の要素を含み、それらが複合的関連をもつことで対象地域内にとどまらない社会的諸関係が構築されてゆく重要な契機となる。日本中世（11～16 世紀）の沿岸部開発に関する史料を悉皆的に収集、整理し、暫定的な史料目録を作成するとともに、開発の諸類型として①（自然の）島・潟形成と利用　②塩入荒野・氾濫原の開発　③築島（嶋築/築港）　④湊の浚渫　⑤漁場の開発　⑥その他　に分類し、それぞれに該当する事例検証を通して、地域における経済活動との関連や支配関係の実態を追究した。

研究成果の概要（英文）：Development in the coastal area, such as harbor construction work, land reclamation, riparian work, irrigation, are composed of various constituents. Their complicated relations lead to various relationships not limited specific area. I've gathered historical records about development in the coastal area in the Medieval Period, from eleven to sixteen century in Japan comprehensively, organized them and made a temporary historical record list. I've classified about development in the coastal area according to six patterns, such as the formation and application of tidal flats, development land damaged from seawater, harbor construction work, dredge harbors, development fishing ground and so on. Based on their case studies, I've investigated about the economic activity in the area and the actual state of the dominance.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：日本史
科研費の分科・細目：中世史
キーワード：中世・沿岸部・開発・干拓

１．研究開始当初の背景

中世の開発については、寶月圭吾『中世灌漑史』（1943）・古島敏雄『日本農業技術史』（1947）等の古典的業績以来、黒田日出男『日本中世開発史の研究』（1984）・鈴木哲男『中世日本の開発と百姓』(2001)・井原今朝男「災害と開発の税制史―日本中世における土地利用再生システム論の提起―」（2004）他の研究蓄積があり、近年の研究動向で注目されるのは、黒田説に代表される中世の開発を大開発（大開墾）の時代とする見解を批判的に継承し、平安時代から鎌倉時代にかけての開発は「開発（かいはつ）」一般を指すのではなく「開発（かいほつ）」であり、開くことより発す（＝興す）ことに重きがある再開発行為で、不安定耕地の安定化にあったとされる点である。

そうした不安定耕地の安定化の代表的事例として塩入荒野の開発があり、河原・自然堤防・州・島・遠浅の海等、沿岸部の低湿地域に塩堤（防潮堤）を構築することで海水の浸入とそれにともなう塩害を軽減し、干拓を進め、耕地化とを図るというものである。従来の研究では、塩堤とその内（陸）側での製塩地や耕地としての側面が注目され、外側の海浜部については十分な検討がなされていない。塩堤構築と耕地開発に先行してなされた可能性の高い浚渫（塩堤外側での掘り込み）についても検討が必要である。それは、船の停泊地整備にも関連する造作事業と考えられる。

船の停泊地としての港湾整備に関し、西岡虎之助は「荘園における倉庫の経営と港湾の発達の関係」（1933）で荘園の倉庫が臨海部に所在し、それがやがて荘園の港湾から港湾の荘園へと発展し、問などが置かれるようになるとしたが、停泊地がどのように整備されるのかについては、研究が滞った状況にあり、中世の代表的湊・津・浦は地域としては概ね特定できるものの、その実態については未解明な点が多い。

沿岸地域の開発は、浚渫・築島（島築／築港）などの港湾整備、干拓・治水・利水などの耕地開墾と土地造成に関わる事項など、多数の要素を含んでおり、それらが複合的関連をもつことで対象地域内にとどまらない社会的諸関係が構築されてゆく重要な契機となると考えられる。地域を沿岸部に限定して史料を検討することは、上述の検証とともに研究代表者が従来取り組んできた海運・流通研究において解明の進んでいないハード面（一部地域で遺構の出土例はあるが、港湾施設やそれを含めた景観等）を文献史料から検出することや管理実務者についての追究にも資することが期待される。

２．研究の目的

中世、日本沿岸地域の開発(浚渫・築島・築港・干拓・治水・利水等)に関する史料を検討することで、土木技術・農業生産・土地支配の状況把握にとどまらない、地域における経済活動との関連、そこに起因する支配関係の実態を追究し、広域的視野から当該期社会の成り立ちを検証する。

３．研究の方法

11～16 世紀、日本沿岸地域の開発（築島・浚渫などの港湾整備・干拓・治水・利水・耕地造成など）に関する史料を既刊の史料集（『平安遺文』・『鎌倉遺文』・『大日本史料』・『大日本古文書』・自治体史史料編他）等をもとに悉皆的に収集、整理する。対象地域については、研究代表者がそれまでの研究において蓄積してきた中世の代表的湊津所在地およびその周辺部とし、抽出作業に際しては、地名辞典類を併用し、地形環境を把握するとともに、史料のデータ・ベース化が図られているものについては、「潟」や「堤」等キーワードでの検索機能も活用し作業の効率化図る。抽出できた関係史料を暫定的な編年目録に整理し、個々の内容を分析・検討する。

４．研究成果

課題にかかる 11～16 世紀の関係史料を『大日本史料』他各種史料集から収集・整理し、調査・分析を行ううえでの基礎となる編年目録の作成を行い、暫定的ではあるが、『平安遺文』『鎌倉遺文』『南北朝遺文』及び『大日本史料』既刊収録分については、概ね整理ができた。しかし、16 世紀の史料については、収録史料収が多岐にわたることもあり、自治体史史（資）料編等を主に未着手のまま期限を迎えたものもあり、現在も作業を続けているが、今後も継続的に補完し、完成度を高めてゆく作業が課題として残っている。

前述の作業と並行して、開発の諸類型として①（自然の）島・潟形成と利用　②塩入荒野・氾濫原の開発　③築島（嶋築/築港）　④湊の浚渫　⑤漁場の開発　⑥その他　に分類し、それぞれに該当する事例を個別に検証した。時代や地域による差異や、①～⑥が複合する事例もある。当面の関心や諸般の制約から②～④を主に検討することとなったが、①に関しては、沿岸や河口部で、洲や島が自然派生的に形成されてゆく過程での停泊地としての利用事例を阿波国津田島の例で追究し、後述の論稿や口頭報告を行った。阿波国津田島の事例は、13 世紀前期の勝浦川河口左岸、園瀬川河口右岸の氾濫原の島における開発と津の状況を春日神社文書等をもとに検討した。

②は、動力による排水技術のない前近代に、

既存の自然条件を受容しつつ行われる氾濫原の干拓等にみられる最も原初的形態であると考えられ、検出される地域・事例ともに最多であるが、防潮・防水・排水・利水施設の築造による干拓、耕作可能地の創出と安定化を意味し、池溝堰堤といった施設と併せて塩浜・畠・田の造成と内容が多岐にわたり、沿岸地域の支配や生業との関わりからも重要な内容が含まれていることが確認できた。

また、③・④は人為的・人工的造成で、摂津国経ヶ島・筑前国鐘ヶ崎・相模国和賀江島・播磨国魚住泊・同国福泊等の著名な事例があるが、石材を主に、竹木や運航利用が困難となった旧船の船瓦などを部材とした埋め立てによる島状停泊地ないしは突堤を造営・修復するというものである。港湾遺跡（集散地遺跡）の調査では、遺構として集落建物の他、荷揚場とみられる石敷や護岸や突堤の一部に相当するとみられる石積み、繋留用の杭、倉庫などの出土例があるが、史料とリンクしている事例は稀である。造成や修復は為政者による支配・管理下での事業としてではなく、多くは宗教勢力（勧進聖や当該地域を造営料所として時限的に付与された寺社）や受益者となる在地の有徳人層による民間主導の下に行われ、その成果が為政者側に追認されるという傾向がみられる。支配権力の分立（中央集権的国家が存在しない）という中世の政治状況の下で、湊津支配においてもそれを一元的・強権的に管理・統括し得た勢力はみられず、湊津支配をめぐる紛争関係史料等から垣間見えるのは地域やその機能により朝廷・幕府・大寺社・守護・土豪層などのうちのいくつかの勢力が錯綜し、それぞれに支配を展開しようとするなかでの対立状況である。施設管理に関連しては、管理実務が行われた拠点で、実務者が駐在した屋舎としての政所と関所の関係、実務にあたった雑掌の存在が注目されるが、その内実については、荘園管理などに類例を探りながら今後も検討を続けることとなる。

中世日本の湊津の多くが、河口部砂州や砂帯の裏側に立地し、直接風波に晒されることの少ない天然の地形を利用していることや、その造営や修復に関する史料を概観しても、埋立（繋留や集散拠点としての地盤確保）と浚渫（船の停泊のための水深確保）が主であったとみなされ、衰退を防ぐために随時、予防的管理がなされたという訳ではなく、利用環境の悪化に対処するかたちで造営・修復がなされており、中世の開発一般と同様、荒廃地の再興とみなすことができる。湊・津・浦などとして地域は特定できても、停泊地はその一定地域に固定的にとらえるのではなく、利用環境に応じ、流動性をもったことが推定され、緩くその一帯とみるのが妥当であるかもしれない。

特別な港湾施設の存在が史料上では確認できないことから、補足的に中世絵画資料での停泊地の景観なども検討したが、燈盧や船を繋留する杭の事例等はあるものの、近世港湾の雁木に相当するような施設は管見のところ見出していない。

⑤については、12 世紀末、若狭国日向浦から多烏浦に移住した海民による漁場開発の事例が著名であるが、漁撈関係の史料は稀少であり、管見では、その経緯を一定度把握しうる新たな事例は見出せておらず、今後の作業でも注意してみてゆきたい。

当該研究の課題申請段階はもとより、研究当初には思いもよらない事態であったが、交付期間１年目を終えようとする 2011 年３月 11 日に発生した東日本大震災と当該研究との関連にも触れておかなくてはならない。近世以降の埋立による陸地の拡大や小氷期にあたる中世の海水面が現在より高い位置にあったとみられることを顧慮すると中世の海岸線が内陸に入り込んでいたことは大震災以前から漠然と認識してはいたが、甚大な被害を受けることとなった広範な浸水地域を地図で確認すると、中世には広い潟湖や干潟であり、近世以降、大規模な新田開発が進められた地域とそれとが概ね重なりあうことが明らかとなり、中世の海岸線をより具現化して把握できるものと考えている。海浜・湖沼・低湿地・新田開発に因む地名も示唆的であり、歴史的経緯を検討するうえでの有効性をもつことを確認している。

前掲１に挙げた井原今朝男「災害と開発の税制史―日本中世における土地利用再生システム論の提起―」（2004）は、従来、開発領主による荒野開発として論じられてきた中世開発史の諸問題を、税制史の視点から見直し、災害と開発が日常化した中世社会において、荒廃した耕地の土地利用をどのように再生させ、徴税しながら課税対象地として拡大し、農業生産を復興させていったのかを土地利用再生システムの問題として再検討するという趣旨であるが、震災復興という今日的重要課題においても注目すべき内容であり、沿岸部の開発を探究する本課題においても、発展的に継承すべき示唆を含んでいることから、接点を探りつつ今後の研究に活かしてゆきたい。

尚、交付を受けた 2010～2012 年度内に発表した論文等は後掲の５に記した通りであるが、年度内に執筆・入稿し、受領されているものの、本報告書作成段階において、他の執筆予定者の遅筆等の事情により未刊となっている図書に掲載予定の論稿として以下の２件があり、何れも初校は提出済みで、2013 年内に刊行予定である。

綿貫友子「中世三国湊の通航税をめぐる相論とその背景」、清文堂出版、2013、未定（仁木宏・綿貫友子編『日本海の流通と港町』p.未定）
綿貫友子「奥羽の港町」清文堂出版、2013、未定（平川新・千葉正樹編『講座東北の歴史第二巻　都市と村』p.未定）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
綿貫友子「書評　藤本頼人著『中世の河海と地域社会』」『史学雑誌』査読有、2013 年、号数・頁未定

〔学会発表〕（計５件）※含招待講演２件
綿貫友子「中世の太平洋海運について」、第４回神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館公開セミナー、2010 年 10 月２日、於神戸大学大学院海事科学部海事博物館
綿貫友子「中世の熊野と太平洋海運」（招待講演）熊野三山歴史協議会公開講座、2011 年 2 月 18 日、於新宮市福祉センター

綿貫友子「中世沿岸部の開発について　―港湾修築と新開―」（招待講演）、東北大学国史談話会、2012 年 6 月 9 日、於東北大学大学院

綿貫友子「中世沿岸部の開発について　―阿波国津田島とその周辺―」、中世都市・流通史懇話会、2012 年 8 月 29 日、於名古屋市歴史民俗資料館

綿貫友子「日本中世の湊津支配をめぐって―修築と管理を主に―」関西比較中世都市研究会、2013 年 5 月 31 日、於大阪市立大学文化交流センター

〔図書〕（計３件）
綿貫友子「文献から見た境界としての熊野・土佐」、勉誠出版、2011,364（竹田和夫編『古代・中世の境界意識と文化交流』p.285～305）

綿貫友子「情報発信と合意の形成　―中世の情報伝達と周知をめぐって―」、創風社出版,2012, 285（松原弘宣編『日本の情報伝達』p.123～149）

綿貫友子「中世海運と遠隔地商業」他、名古屋大学出版会、2013、354（中西聡編『日本経済の歴史　―列島経済史入門―』p.26～66）

〔その他〕
ホームページ等　　該当無

６．研究組織
(1)研究代表者
綿貫　友子（WATANUKI TOMOKO）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40314447

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：